

修学旅行における民泊について

1 きっかけ

生徒の現状と民泊のねらい

本レポートの学校では、従来の修学旅行は生徒にとって、「してもら」「させられる」が多かったようです。しかし、この民家泊は、受け入れ先の家族との温かいかわりの中で、主体的にコミュニケーションを取りながら、家業を手伝うことで達成感を味わい、家族の一員として認められるという、経験をすることをねらいとしています。つまり、この学校行事を通し、生徒たちが自己肯定感を持って、人生への希望（時間的展望）を持てるようになることを目指したと言えます。

年齢に応じて有効な体験活動

国立青少年教育振興機構の「体験活動実態調査」によると、子どもの年齢に応じて、どのような体験活動をより重視すべきかを提言

（1）勤務校の目に見える部分の状況として

私の勤務校の生徒の中には、自分にとって信頼できる者の存在がなく、自己否定的で「どうせ自分なんか何をやっても駄目だ」と考える生徒が見受けられました。また、「やりとげた」という充実感・満足感などを、今までの人生経験の中で味わっていない生徒がいました。

目に見える生徒の現状は以下の通りで、学校全体が毎日をしのごことに精一杯の感じで、私は「何とかしなければならない」と思っていました。

〈資料1〉具体的な生徒の様子

- 欠席や遅刻を繰り返す生徒が多かった。
- 授業中に中抜けをし、近くのコンビニに行ってしまう生徒がいた。
- 授業中の携帯電話・メールなどが常習的に行われ、注意できる職員が少なかった。
- 職員の指示に従えない生徒がおり、集会等の成立が難しかった。

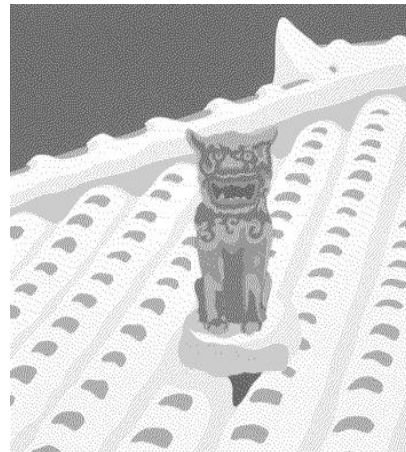
（2）上記のような生徒の現状から必要と思われた学校行事

このような生徒の現状を変えられるよう、学校生活の様々な場面において、私たち教師は試行錯誤をしていました。その中の一つとして、修学旅行をクローズアップしました。今回の修学旅行は従来の内容（以前は沖縄のマリンスポーツ体験の修学旅行など）では得られなかったものにしたいと考えました。生徒の現状から、「人の温かさ」「まだまだ、人生捨てたものでは

しています。①小学校入学前は「自然体験」、②小学校低学年は「友達との遊び」、③小学校高学年は「自然体験」「友達との遊び」、④中学校は「自然体験」「友達との遊び」「地域活動」が重要だとしています。

また、日数とあまり関係なく効果がある内容は、挨拶・感謝や謝罪等のマナーやモラルのようです。

ない。」という実感を味わわせることが出来る内容にすべきではないかと思ったのです。そして、できれば人生経験があって、元気のある方々と直接触れ合うことが出来る「民家泊」（3泊4日のうちの1日が民家泊）が、生徒たちの心に働きかけられるのではないかという学年団の結論となりました。



2 実践のための準備

（１）管理職の理解を得る

1年次の5月頃、次年度2年での修学旅行のプランが検討され決定します。1年次の4・5月は残念ながら、問題行動が多発している最中でした。この状態では、「民家泊」として他人の家に生徒たちを任せることはできないと、当時の校長には、指摘されました。

そのため、管理職に対して、その時に備えて、毎日生活指導を行っていること、班編成を少人数として、相手方から十分に生徒に対して目が届くような工夫をすること、また、万一に備え保険に入るなどの、多くの努力や工夫をしていることを何度も伝えました。学年の修学旅行にかける熱い思いを繰り返し伝え理解してもらいました。

（２）創意工夫ある事前準備について

少人数でなければ、迷惑をかけてしまう可能性があったので、少人数での分泊としました。また、お世話になる家の方に事前に生徒の性格・様子や特徴、心配なことなどを知らせておき、顔を合わせたらすぐ、民家の方と会話ができるための準備をしました。

早期「事前準備」の有効性

授業（各教科・総合学習）と学校行事をリンク（連結）させることは、小・中学校の学習指導でも行われてい

① 民泊をお願いするお宅に、事前情報を伝えておきました

○第1段階

デジタルカメラで写真を撮り、写真入りのはがきを作成して班員の紹介文を付け、郵送しました。（まず、顔を覚えてもらうためです。）

ます。

前記のような高等学校においても、事前に国語の授業の中で「書く・話す」などの自己表現の幅を広げ、書くことの抵抗感の軽減を図るために、俳句を作る、新聞の「コラム」を速記する、「手紙の書き方」を学ぶ等の工夫と努力をしていくことは有効です。

修学旅行終了後、お世話になった民家の方々に御礼状等を書いて送る等、人間関係を維持していく上での基本的なマナーを指導することも大切です。

○第2段階

生徒自身が、民家泊の際、話題にしたい内容等について、作文を書き、事前に郵送しておきました。時間を有効に活かして、円滑なコミュニケーションが取れるようにするためです。(国語の授業時・学年行事等でも時間を設定して指導しました。)

② 自分の気持ちを伝えられるようにするために、「書く」ことで自己を見つめ直す授業の工夫をしました

○ 国語の授業にて文章を多く書かせる練習をしました。

当時学年の担任の一人が国語科教員であった関係で、積極的に教材や単元の指導方法を工夫しました。

そして、授業内において「手紙の書き方」を中心とした授業展開を1年間かけて継続的に行いました。

○ 学年行事に結びつけ、積極的に自分の気持ちを伝える意識をもたせられるように努力しました。

・俳句を作成し、学年全体で企業の俳句コンテストに応募するなどしました。自己表現力を豊かにし、言葉を選ぶ意識を高めるためです。

・自分の気持ちを伝えて、文を書くことが苦手な生徒に対して、LHRの時間に、全クラス共通で新聞の「コラム」を速記させ、タイムを競わせました。その上位を学年室・教室に掲示するなどし、ゲーム感覚でやる気を喚起しました。筆者の意見や表現内容がまとまっているコラムを書くという作業を通して、良い文に触れさせる体験を重ね、文を書く抵抗を軽減させるためです。

3 とりくみ

キーワード「人の温かさ」 「第二のふるさと」の意味

高校生がいない島の家族にとっても、高校生の宿泊はうれしいものといえます。両者の「温かい心の交流」をとおして、良好な他者関係を築けるようになります。

家業を手伝い、他者の役

(1) どんな修学旅行を目的としているのか

学年発足時から、前例にとらわれず生徒の思い出に残る修学旅行を企画したいと考えていきました。また、キーワードは「人の温かさ」「第二のふるさと」としました。ある業者から沖縄で、民家泊を中心とした修学旅行の受け入れ準備をしている離島(伊江島)があるとの情報を得ました。その島には高校がなく、島の子どもたちは高校生になると島を離れ、残された家族は寂しい思いをしていると聞きました。

そこで、本校の生徒が何うことが島の人たちに対しても何かのプラスになり、生徒たちも人の温かさを感じる体験ができるのではないかと思い、実践に移しました。

に立ち必要とされることで、「第二のふるさと＝居場所」と思えるようになっていくということです。

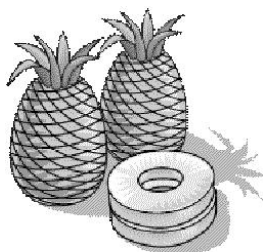
不安の高い生徒への配慮

対人・集団行動への不安感の高い生徒に対しても、個別相談等をして、班メンバーの組み合わせに配慮をする必要があります。

受け入れ先の民家の方にも、配慮事項を理解していただくようにし、危機対応についても、よく話し合っておくことが大切です。

体験活動とコミュニケーション

自分の体験を振り返って言語で表現し、伝達し合う活動を十分に行うことは重要です。体験活動と言語活動は相互に関連して高まる能力だからです。



(2) 民家の方と生徒たち(班)の組み合わせは慎重に

生徒指導上の心配がある生徒も少なくなかったため、民家の方とも何回も打ち合わせを行い、考えられる問題等を伝え、班編制の際、生徒たちの組み合わせなどは十分に検討しました。

(3) スムーズなコミュニケーションができるように

お世話になる民家の方に写真付きのはがき・手紙を郵送(2の(2)の①参照)しました。

1泊という限られた時間だったので、事前情報を流しておくことがポイントであると感じ、会った瞬間に名前を呼んでもらえて、会話がスムーズにできるように工夫をしました。

(4) 自分たちの子供として

民家の方々は、自分たちの子どもが高校に通うため沖縄の本島に行っているため、自分の子どものように生徒たちに接してくれました。島に到着して、生徒を前にしての集会での、「島を離れるまでは、この子たちは、自分の子どもなんだ。」「先生方、心配はいらない…任せてくれ。」という代表の方の言葉が印象的でした。

(5) 民家での体験

それぞれの民家ごとで、生徒たちは自分たちのために、三食、心のこもった美味しい料理を作ってもらい、本当の家族のように何気ない温かい言葉かけをしてもらいました。

生徒たちの主な民家の方とのふれあいは、夕食の手伝い・家業(農業)の手伝い・サーターアンダギー等のおやつづくり・犬の散歩・悩み相談など、多岐に渡りました。

生徒たちも、民家の方々と一緒にさまざまなことを体験することができました。自分の気持ちを伝えることもでき、家族との楽しい会話が終始はずんだようです。

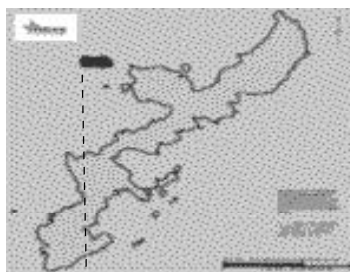
(6) お礼の手紙

島での体験から、感謝の言葉や「もう一度ぜひ、沖縄に行きたい」等の、心のこもった礼状を、多くの生徒が発送することが出来ました。(※P33「生徒たちの主な行動変容」参照)

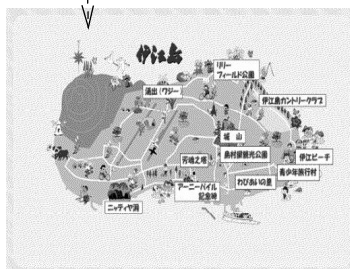


4 見えてきたこと

沖縄地図



伊江島



人間関係づくりの基礎

「自尊感情」「自己肯定感」は「自分を好き・大切と思え、自分が価値があるものと思える感情」です。「自尊感情」が高い人ほど他人の存在に敬意を払え、人の良い所を見ることができると言われています。ですから、「自尊感情」「自己肯定感」を高くもてることは、良好な人間関係を築く基本になるものなのです。

生徒たちは、民家の家族の方々に家族のように大切にされ、心通じる会話ができました。そして、民家の方々と紅芋チップスづくり

(1) 学年団の結束力とタイミング

単なる修学旅行という事ではなく、学校改革の1つの試みとして担当職員の意識がこの修学旅行に集約されました。また、本学年の職員のモチベーションと民家の方々と業者のやる気や心意気も一致し、すべてが前向きに進みました。

(2) 生徒の行く前と、行った後での変化について

生徒の意見は沖縄ということで、方面的には反対という意見はありませんでしたが、「民家の方の仕事を手伝うことに自信がもてない」という、後ろ向きな意見がありました。しかし、沖縄の持つイメージの資料提供として、「リゾート」「離島」「マリンスポーツ」という下見の時のビデオやポスター、図書室での調べ学習の「沖縄買い物マップ」等を有効に活用し、生徒たちの修学旅行に前向きに取り組もうとする、モチベーションを維持しました。

伊江島に到着して、港の集会場にてお世話になる家の方との対面では、とても恥ずかしそうでした。「大丈夫なのか？」と心配になる班もありました。しかし、一日泊めていただき、次の日の昼過ぎに港の集会場においては、どの班も本当の親子が昼食を取っているかのような印象を受け、この企画が間違っていないことを確信しました。

いよいよ、別れの時がきて、どの班も「涙・涙……。」映画の一場面を見ているような光景でした。船が港から出て行く、紙テープもたくさん切れ始めました。学年主任の私をはじめ、職員が思わずもらい泣きをしてしまいました。

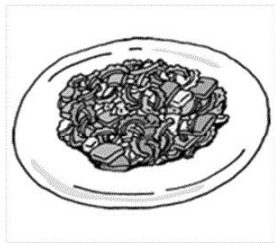
修学旅行を終えて、生徒は口々に、「また沖縄に行きたい。」「第二のふるさとになった。」「おじさん、おばさんとメールをしている。」「また、相談するんだ。」など、毎日の話題となりその後も、多くのプラスの意見が職員に寄せられました。

【生徒たちの主な行動変容】

A子 職員の言うことも聞くことができなかつたA子が、修学旅行後は「沖縄のオトウ（父親という意味の方言）に毎日メールして相談に乗ってもらっている……。」などと言いながら学年室に来て、職員に毎日報告してくれるようになりました。

B男 修学旅行自体に参加したくないと言っていたB男が、

や海に潜る等の、新たな体験にチャレンジしていく過程で、「自分のことが好き」「大切だ」と思える契機となったと言えます。



人とのコミュニケーションを重んじる修学旅行

家族のように親しんだ民家の方が、自然壕（ガマ）などの戦争遺跡見学や戦争体験のお話を願うことで、教育効果を上げられる可能性があります。

親しい人から話を聴くことで、問題意識は身近なものに変化します。見学だけでなく、人とのコミュニケーションを重んじる修学旅行の意義は大きいと言えます。

「民泊」の入念な準備の必要性和やり甲斐

民泊は手間暇がかかるので、職員の負担は少なくなく、本事例のように、生徒の実態に合った「ねらい」を全職員が共通理解し、一丸となって取り組み、適切な時間を確保できれば、子どもたちに貴重な体験を提供することができるのです。

帰りのフェリー乗り場で、手作りお弁当を民家の方と食べている姿が、本当の親子のように見えました。B男の今まで見たこともない優しい表情に、職員一同驚きました。その後も「アルバイトでお金を貯めたらもう一度、沖縄に行く……。」といううれしい報告を受けました。

【生徒が書いた礼状の紹介】

○前略…（伊江港から）家についてすぐに海に連れていってくれたオジイ、（海から）帰ったらすぐに温かいご飯を作って待っていてくれたオバアに、一気に緊張が解けました。オバアは料理上手で、二日目に体験した芋チップス作りは…（略）。短い間だったにもかかわらず、温かく家族のように迎えてくれたオジイとオバアには感謝の気持ちで一杯です。島を離れた船の中で、自分の祖母と重ねて涙が出ました。（略）

○前略…この度の民泊では大変お世話になりました。民泊先で自然にふれあい、島の文化を学び、本当に素晴らしい所でした。芋チップス作りの体験ではたくさん作れたし、とてもおいしかったです。二日間の短い間でしたが、とても良い体験になりました。（略）

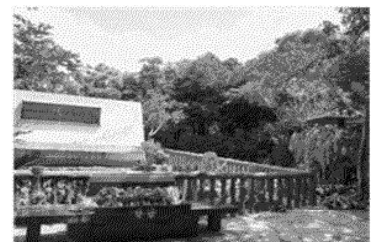
○前略…私は沖縄に行くのも会ったことのない人の家に泊まるのも初めてだったのでとても不安でした。反面期待も一杯でした。〇〇家の皆様は私たちを温かく迎えてくださって、本当の家族のように接してくれ、本当にうれしかったです。私にとって一生の宝物としての思い出です。ありがとうございました。（略）

（3）「民泊」の深い内容を理解して実施する重要性

戻ってきた直後の感想として3泊4日の期間中、伊江島の民泊が1日と限定されていましたが、今回のような内容、手応えであれば、終日お任せして、平和教育も含め教育的効果が十分に期待できるのではないだろうかと感じました。（伊江島の観光協会の方をはじめ、大変協力的でした。）

しかし、一方で「すべて任せてしまえる」、「職員は楽だ」という発想では、民泊の修学旅行は成功しません。目の前の生徒たちに対して何を学ばせたいのか、そして、我々職員ができる最善のサポートは何かを明らかにすることです。

本校での「人との触れ合いを大切に」修学旅行の実践が、他校にも自信と希望を与え、多くの高等学校の修学旅行で、民



泊が行われるようになりました。

私たちのように学校行事を通して、生徒達の成長・変容を見る喜びを味わえる先生方が増えることを願っています。

コラム3【「愛着心，自尊感情，自己肯定感」を生徒指導の柱としたA高校の実践】

A高校の，従来の修学旅行におけるねらいは，「①沖縄の自然・郷土文化に触れ，異文化の理解・教養を深める。②沖縄の歴史を学び，平和の大切さ戦争の悲惨さを考える。③集団生活を通し，相互理解と親睦を深め協調性を養う。④農業・漁業の体験活動を通し，社会性を養う。」というものでした。しかし，A高校は建て直しのために，「愛着心」，「自尊感情」，「自己肯定感」を3つの柱とし，修学旅行のねらいを「①家業を手伝い他者の役に立つことにより自己有用感・自尊感情を高める。②民泊家族との交流を通じて良き他者関係を築く。③民泊家族を良き家族関係のモデルとし，モデリングの対象の獲得を得る機会とする。」というように，書き換えた上で実施しました。この修学旅行はA高校における，包括的生徒指導の一翼を担う重要な行事となったのでした。

この修学旅行を経験した生徒達の問題行動は次第に減少し，3年生になった時には，自分たちで集合をして学年集会をできるようになったり，仲間や教員の気持ちを思いやる言行が増えたりしたそうです。また，進路意識も高く持ち，進路決定率も上がるなどの継続した変化があったといます。職員が心を一つにし，日々の継続・一貫したかわり・指導をしていくことが大切です。

コラム4【規範意識を高めるために】

問題行動の起因として，よく「規範意識」の低下が言われます。「規範意識」の基礎となるのは，人との交流体験を通して得られる感情である「自己有用感」であると思われます。「自己有用感」とは，「自分がしたことを感謝されてうれしかった」「自分は人の役に立って認められている」等の感情です。

しかし，近年，都市化・少子化等から地域社会における人間関係の希薄化が進んでいますし，この「自己有用感」は発達段階として，中・高校生になると低くなると言われています。それゆえに，学校行事・係活動等を通して，中・高校生の時期に自己有用感等を高めることは有意義なことなのです。



《参考となる文献》

千葉県総合教育センター（2010）．文部科学省初等中等教育局児童生徒課生徒指導室一学校における体験活動の充実について，千葉県教育庁教育振興部指導課一体験活動の充実と千葉県における取組一 千葉教育，595．

国立教育政策研究所（2008）．規範意識をはぐくむ生徒指導体制一小学校・中学校・高等学校の実践例 22 から学ぶ一

斎藤剛史（2010）体験活動が子供の生活や意識を左右 内外教育，6036

滝 充（2003）．子どもの規範意識 規範意識の形成と教師の指導力

< <http://www.nier.go.jp/a000110/Kihan.pdf#search='子どもの規範意識'> >（2010年6月25日）

渡辺弥生・小林朋子（編著）（2009）．10代を育てるソーシャルスキル教育一すぐに使えるワークつき一 北樹出版

八並光俊・國分康孝（編集）（2008）．新生徒指導ガイド一開発・予防・解決的な教育モデルによる発達援助一

